荒尾南遺跡Ｃ地区

大垣市荒尾町・桧町

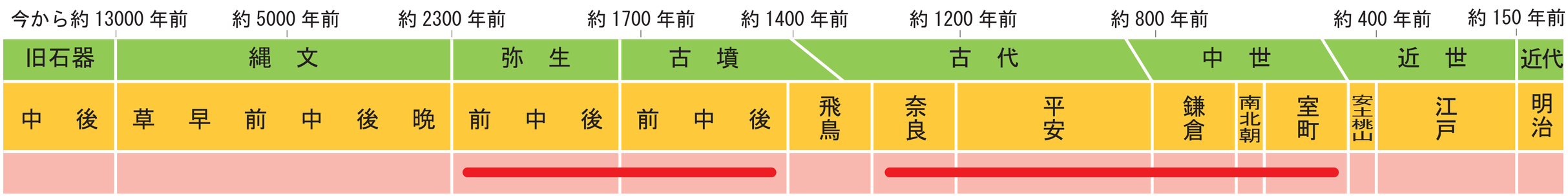
方形周溝墓群

Ｃ地区全域は、自然堤防帯上に立地すると考えられ、弥生時代から古墳時代前期にかけて、方形周溝墓が墓制の中心である墓域でした。特に弥生時代中期には多くの方形周溝墓が造営されました。墳丘と主体部の関係を見てみると、主体部としての墓坑を造った後、盛土している場合がほとんどでした。複数の主体部が見つかった方形周溝墓もあり、埋葬を繰り返しながら墳丘に盛土していったと考えられます。

木製品の生産が行われていた大溝周辺

大溝から出土した木製品

弥生時代中期に掘削された大溝は、荒尾南遺跡の東部を南北に流れるもので、長さ450m以上、幅はほぼ10m、深さ1.5mに及びます。弥生時代末期から古墳時代前期になると、大溝の岸辺では木製品の生産が行われるようになります。大溝からは木製品の未製品や材料、岸辺には木製品の生産のためと考えられる建物跡や木製品を加工するのに使った鉄器を研ぐための砥石などが見つかりました。

方形周溝墓

南西部では、弥生時代中期のものよりも大きい古墳時代初頭の方形周溝墓が見つかりました。墳丘は土手状に周囲に盛土し、中央の凹んだ部分に土を充填するという方法を繰り返して盛土されていることが分かりました。遺体は盛土の途中で置かれたものと思われ、墓坑は見つけることはできませんでした。